古写真に見る日本近代医学教育のあけぼの

－ポンペ、ボードイン、マンスフェルト－

下田研一 [1)]
[1)] 長崎大学附属図書館

日本の近代医学教育は海軍伝習派遣隊の一員として来日したオランダ海軍軍医ポンペ・ファン・メールデルフォールトが安政 4 年（1857）11 月 12 日に長崎奉行所西役所内で開始した医学伝習に始まる。ポンペの後にはアントニウス・ボードイン、ファン・マンスフェルトが続き、オランダ人教師たちが日本の近代医学教育の黎明期を導いた。この時期はまた日本に写真術が渡来し実用化された日本写真の黎明期でもあった。

ポンペ（在日期間 1857-1862）は学生たちに請われて写真術の研究に取り組んだが、長崎において写真が実用化されるにはスイス人写真師ピエール・ロシエの来訪を待たねばならなかった。ロシエが撮影したステレオ写真には松本良順とともに医学伝習生たちが写されている。

ボードイン（在日期間 1862-1866,1867,1869-1870）は出島内に設けた写場を中心に自ら撮影した写真やイギリス人写真師フェリーチェ・ベアト等から買い集めた写真を多数アルバムに残している。ボードインの日本写真コレクションには、長崎で教えた医学生たちのほかに養生所、医学所、分析窮理所等の写真が含まれており、ポンペの時代に続く医学教育の進展を見ることができる。

マンスフェルト（在日期間 1866-1879）もまた自ら撮影したと思われる写真とともに上野彦馬や冨重利平等の日本人写真師から購入したと思われる写真をアルバムに残している。そこに写る長崎医学校及び医学生たちのようすからはポンペが目指した近代医学教育の完成形を見ることができる。

発表では、長崎大学医学部編・刊『長崎医学百年史』（1961）を参照しつつ、長崎における「日本近代医学教育のあけぼの」が見て取れる古写真を主に長崎大学附属図書館が収蔵する『幕末・明治期日本古写真コレクション』から紹介したい。